

2017年度 福島・むつ・多賀城・岩手

村本邦子（立命館大学）

2020年2月23日、9年目を迎える「東日本・家族応援プロジェクト・シンポジウム 2019～被災と復興の証人とこれから」、コロナ肺炎で様々なイベントが中止になるなか、注意を呼びかけつつも予定どおり開催した。午前には団さんの漫画トーク、午後からは、例年どおり院生チームによる現地の状況と学びの報告、その後、アーティスト瀬尾夏美さんの「震災9年、二重の風景」の講演、瀬尾さんと院生たち3名とのパネルディスカッションとなった。

瀬尾さんは、院生たちとそれほど年齢が変わらない若手だが、著書『波の下、土の上』（晶文社）の印象通り、鋭い感性とともに思慮深く言葉を選びながら、陸前高田で経験してきたことを話してくれた。彼女がやってきたことは、アーティストとして絵や文章を通じて語りの場をつくり、「他者のことばを記述する」という取り組みとして説明されていた。誰かが体験したことが話され聞かれることで、他者の身体が介入して物語が生まれる。そこには「誤読」も生まれるが、それはフィクションの始まりであり、語り合われることによって共有体験となる。そうやって、その場にいなかった非当事者から、津波に流されて亡くなった死者までである体験のグラデーションをつなぐことで、伝承が可能になる。シンポ後の食事会での話を含め、話せば話すほど、私たちのやろうとしてきたことと近いのではないかと感じたが、逆に、明確に違うとわかったこともあった。



いずにしても、彼女が本当に自分を鍛えることのできる場所を上手に選び、そこで起こってくることに誠実に向き合いながら、場に育てられてきたのだということがよくわかった。今回頑張ってくれた院生たちも含め、これからの若い世代に期待しよう。

2017年8月福島

2017年8月29日(火) 川内村 感がえる知ろう館

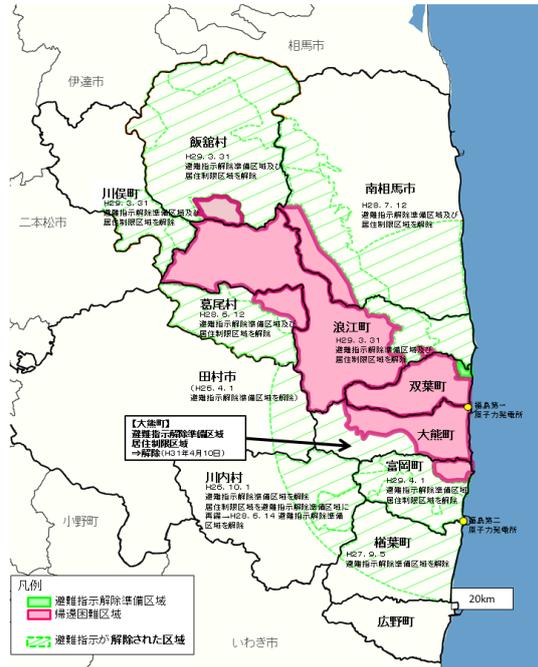
いよいよ7年目のプロジェクト、夏のスイーツアワーは福島だ。2017年3月末日、川俣、飯館、浪江、富岡などの避難指示解除準備区域だったところが解除となった。



2012年4月1日 経済産業省

郡山でレンタカーを借り、双葉郡川内村高田島地区にある「感がえる知ろう館」を訪ねた。原発25キロのところにある。

これは、2012年8月に、バイク雑誌の編集者である西巻裕さんが、廃校になった学校のプレハブ音楽室を利用して開設したものだ。西巻さんは、もともと関東の人で、震災の2年前、川内村に住みつき、高田島



2017年4月10日 経済産業省

地区がおもしろいので、こちらに移ったという。

おもしろいというのは、「いい加減さ、我は我、ゆるさのような感じ」なのだそう。ここはもともと水道がなく、それぞれ地下水や井戸水をポンプで汲んで使ってきた。だから、地震の時も、インフラに困らなかった。水道のない村は、日本に3か所だそう。

もともと田口ランディさんとネットでつながっていて、震災後から、毎夏、1泊2日で「川内村自由大学」を一緒にやっている。ランディさんの勧めもあって館をオープンしたが、展示物は手作り風で、かつての村の風景やニュースレター、原発作業員の防護服、放射能測定器、メルトダウンに関する資料などである。イノシシでもキノコでも何でも食べているそう。



スパリゾートハワイアンズ

それから、フラガールのいわきスパリゾートハワイアンズに寄った。炭鉱閉山の危機を生きのびる映画「フラガール」も印象深かったし、震災復興のシンボルとしても際立っている。雑誌などでもしばしば取り上げられているが、常磐炭坑で働く人たちに伝わる「一山一家」という精神的支柱があったからこそ、助け合い、困難を乗り越えたということのようだ。たしかに、たくさん家族連れが来てにぎわっていた。

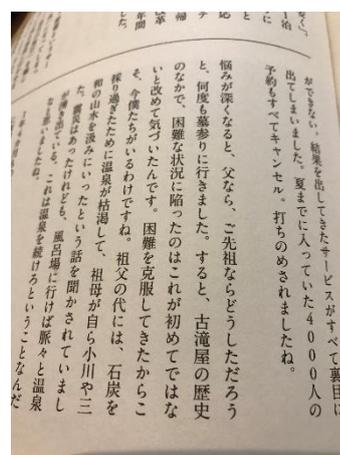


いわき湯本温泉古滝屋

たまたまその夜の宿は、いわき湯本温泉古滝屋だったが、部屋に300年を越えるという宿の歴史をまとめた冊子が置いてあり、思わず読みふけた。現社長が震災の危機を「歴史があるから乗り越えることができた」と実感したことから冊子を作成したという。

この宿は、過去にも二度、存続の危機があったが、生きながらえてきた。今回も、一年半の休業を経て、事業を縮小して再開したとのこと。ずいぶん頑張っている若社長のように、館内には、水俣からの通信物やさまざまなチラシも置かれていて、共感できる宿だった。

あっちに行っても、こっちに行っても、福島のみなさんが、いろんな次元で頑張っておられることがよく伝わってきた。



2017年8月30日(水)
富岡町 松村直登さん

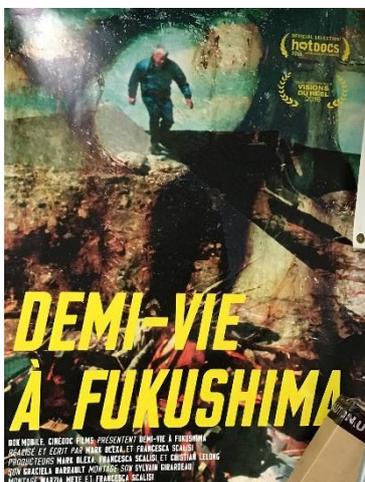
翌朝、富岡町の松村直登さんを訪ねた。原発12キロ、この4月1日に避難指示が解除されたが、無人地帯となったその町に動物たちと一緒に住み続けた人だ。

松村さんを主人公とする「残されし大地」というドキュメンタリー映画の大きなポスターが貼られていた。ベルギー人監督によるもので、最後の編集をしにベルギーに帰ったところで、ブリュッセルのテロに遭って亡くなったという。テロの犠牲者を追悼する会で上映されたそうだ。どういう因果なのだろう。



原発が爆発して、自衛隊がしつこく出ろ出ろと言ってきたが、動物70匹くらいに餌をやって回っていた。最初は、犬の鳴き声に隣の家を覗いたら、置いていかれた犬が、「顔見知りなものだから、餌くれくれとねだる」。もしかしたらと、扉あけたら玄関に餌があった。隣も、その隣も、そのまた隣もと、2〜3キロ走ったら、ずっと置いていかれたペットがいて、餌をやって回ることになった。そのうちやるものもなくなったので、ダメ元とネットで訴えたところ、いきなり百万円入ってきた。自分で使ってしまうとまずいだろうと、団体を作って、通帳を別にした。結局、NPO法人まで作るようになった。そして猫何千匹も飼うことに。

ここは警戒区域だったから誰も入れなかった。ライフラインは全部切れたが、地下水も出るし、ロウソクはあった。自給自足だ。日本のメディアは上から縛りがあつが、外国のメディアは逆に何とか入ろうとして、最初にやってきたのがAP通信のドイツ人だった。行けるとこまで行ったらあ



とは線路歩くと言うが、30キロはある。迎えに行くかと、夜中、車で走れる所まで走って、ライトをつけたまま線路に上がって歩いた。自動販売機がまだ生きていて、駅のホームで缶コーヒーを飲み、さらに歩いて、トンネルに入った。真っ暗だが、足音が聞こえる。途中で出会ったので、「マイネームイズ松村」と言ってみたが、ずっと何も言わない。「なんだこいつ」と思いながら、後で「なんでしゃべらないの?」と聞いたら、びっくりしすぎて、口から心臓が飛び出そうだったと。車まで戻ったら、バッテリーあがってエンストしていた。朝、とりあえず缶ビールで乾杯。その男は3日ほどいたが、その間、ほとんど何も口にしなかった。松村さんに出会って人生変わったと、今も、毎年2度ほどやってくる。

そこから、外国人向けに記者会見をしたり、映画の話が複数舞い込んできたり、ヨーロッパに講演に招かれたりした。動物の話や東電とのやり取りを面白おかしく話してくださるが、非常に個性的で一本筋の通った人だ。東北にはこんなタイプの人っていて、ひよんな巡り合わせから国際的な有名人になっている。元気で力強いが、健康だけは心配だ。



南相馬復興ツアー

午後は、南相馬の復興ツアーに参加、ボランティアガイドの長谷川義信さんに3時間ほどかけて南相馬を案内してもらった。南相馬は日本で三番目に観光資源が多いところなのだそうだ。長谷川さんは、もともと観光ボランティアをしていたのであって、震災からではない。

実際、大悲山の摩崖仏や大杉は迫力があつた。南相馬の一本松も見せてもらったが、まわりに無骨に除染土の袋があつて驚く。VTRで見た馬追もなかなかの迫力。機会があつたら実際に見てみたいと強く思った。





2017年8月31日(木) 浪江町 豊田動物病院

31日(木)は、浪江町の豊田動物病院を訪れ、豊田先生と赤間さんの話を聞いた。浪江の動物の保護活動が続いている人たちだ。

ここも「帰還困難区域」を除き、4月1日に避難指示が解除された。豊田先生は、毎週木曜日に避難先の二本松から戻ってきて、犬猫の避妊去勢手術をしている。赤間さんはそれに合わせて犬猫の捕獲をし、手術して、里親探しをするか捕獲した場所でもリリースし、餌を与えるということをやっている。野生動物に餌付けしないようにしながら、猫に餌をやるのに苦戦を続けてきた。

もともと、赤間さん自身が動物好きと言うよりは、妻と子どもが好きで、犬4匹、猫13匹を飼っていたそうだ。震災翌日の朝、避難するよう放送が流れたので、みんな避難したが、赤間さんと妻は犬がいるので避難しなかった。3月20日まで浪江にいて、2日目から部落部落を歩き、ペットを保護して自宅に連れてきて餌をやっていた。20日以降、自衛隊や警察がうるさくなり、フル装備で全面マスク、装甲車ばかりという中で、一時は津島に行った。ペットを連れて避難所で飼っていた人たちが、そこから移動する時にペットはだめと言われ、泣く泣くもらう人を探さなければいけないという状況だった。

4月22日から浪江にはいっさい入れなくなった。赤間さんはJビレッジで原発労働をしていて、通行許可証があったので、仕事に来て、餌やりに家に寄っていた。あ

る日、放された動物が道路いっぱい、チワワや猫やらがドーッとたくさん走ってきて、その光景をいったん見てしまったら、もうやるしかなかった。最初のうち、犬たちはみんな寄ってきた。興味ない人は走るから、車に犬がぶつかって犬の死骸がいっぱい。夏場頃には、ほとんど寄ってくる犬がいなくなった。寄ってくるのだけをつまえて保護していた。

郡山の息子の所から朝4時にJピリッジ集合なので、郡山を夜中に出て、遠回りしてこっちに来て、犬猫を保護したら、家の裏につないで仕事に行く。仕事が終わったら、また保護して連れてくるということを2年間やった。犬だけで200匹以上。最初の頃は、団体が預かってくれていたが、だんだん引き上げてしまって、2013年の初めには犬の団体がなくなった。初めの頃は、動物支援団体になると300万もらえたが、その時期が過ぎれば誰もいない。フェイスブックに写真を載せて里親を捜すが、6年も経つと出る数も少なくなり、犬25匹、猫70匹近くいて、全部面倒見ている。

人がいなくなって6年。「犬が可哀そう、猫が可哀そう」と餌をばら撒いていった人たちがたくさんいた。立ち入り禁止だから、大丈夫というところにどんどん投げ込んだ。犬猫の餌にもなったが、鼠も食べ、アライグマも食べ、ハクビシンも食べた。可哀そうだからとただ餌をやる、そこに理念がなければ多頭飼育と同じ。繁殖制限も必要。



2013年9月に獣医の豊田先生と TNRS を始めた。町の中に餌箱を置いて放す。アライグマがすごいので、餌箱の高さを工夫したり、入口の大きさを工夫したりした。改良に改良を重ね、最新版では、アライグマにかじられないよう鉄板で作り、1m50cm くらいの高さにした。低いと猪が来るが、高すぎれば猫が届かない。行政が「今は人間優先で」と、動物保護への風当たりが強くなった時があった。それで役場の人と話した。規制すれば必ず入る人がいるから、誰かを中心にきちんとやる。地域猫はできないが、TNR して餌箱にえさを供給していくということで、浪江町の役場と双葉の警察に許可をもらってやり始めた。

人間と動物の双方に作られている秩序のすごさを思う。川と海の汽水域のように、ちょうどいい塩梅の動物がいた。それが、帰還困難地区を作って5年も6年も人が住まなくなったから、猪やハクビシンが巨大に成長し、野生と人の境界がなくなりつつある。今は猪もふつうに歩く。除染している作業員の前を子ども連れの猪がのどかに歩いて行く。危害が加えられないことを学習すると共存する。

害獣駆除も地元の間がやらないとダメになる。夜、暗くなって、ドンとぶつかったら大変。アライグマは強くて病気にかからないし、繁殖力すごく、どんな雑菌や病原菌を持っているかわからない。アライグマには北限があり、震災まではほとんど見なかった。猿もいなかった。今、全体的な変化が起きている。

動物の胎児や内臓の線量調査もしているが、それほど影響はないようだ。多少影響があるのはアライグマで、アライグマは

土の奥深くの物を食べる。それ以外はペットフードを食べているので、なくなった。津島で保護した猫の1匹に少しあったが、ふつうの餌を食べさせたらゼロになった。

犬猫の支援に補助金出ることを知ったのは何年も経ってからで、申請してもだめだった。福島で3団体に出たが、被災犬猫ではなく地域の犬猫だった。金目当てと言われるのしやくだから、もらわずやろうと、餌も現物をもらい、シェルター作るもすべて自腹、スタッフも完全ボランティア。自分の庭を掃除したり、遊びに来て餌をやっている感覚。そうやっていると変な人はこない。天敵は人間でしかない。震災がなかったやってなかった。光景のインパクトで人生が変わる。原発と地域猫なんて、世界でも初めての経験だろう。

原発に近く避難指示区域となっていたところに住み続けたり、活動を続けたりしてきた人たちの尽きることのない話を聞きながら、自分の価値観に添って自分の人生の決断を行い、生きている人は魅力的だと思った。20キロ圏内でも、田んぼには青々と稲が育っていた。食べられないので、家畜の餌になるそう。こんなに美しい土地を汚し、生態系を崩してきた人間の欲望と愚かさが無念だ。



2017年8月むつ

2017年8月31日～9月2日 プロジェクト2017 in むつ

31日、福島からむつへ移動し、夜はプロジェクトのレセプション。現地で動いてくださっている実行委員会のメンバーは、毎年入れ替わりつつ、入念な引継ぎと継続メンバーの支えがあって、今では当たり前のように、しかし密かにあちこちに細やかな配慮とともに運営が回っている。1年目は何もわからなかったというスタッフが、回を重ね、常に変化する状況に対応しつつ、より良いプロジェクトになるよう工夫し、十年後、どのようにこれを着地させるのかという悩みも含めて共有してくれていることを知って、感謝の気持ちでいっぱいになった。メンバーのこんな姿勢は日常の仕事にも反映されているに違いない。移動になった元実行委員会メンバーたちが毎年、駆けつけてくれるが、それもこんな関りがあったることだろう。「十年間のプロジェクト実行委員の同窓会名簿を作ったら、かなりのネットワークになりますね」と言ったら、「青森だけでなく、岩手や宮城、福島でも、このプロジェクトに関わった人たちの同窓会名簿を作ったら、直接会ったことがなくても、すごいネットワークになりますよ」という答えが返ってきた。

いつも一緒にやっている中村正さんが事情で今回は参加できなかったため、地元の力に頼み、支援者支援セミナーをむつ市児童相談所の杉浦裕子さんと一緒に担当し、お父さん応援セミナーを「お父さん・

お母さん応援セミナー・ほほえみ講座」として「青い森のほほえみプロデュース推進協会」にやって頂いた。支援者支援セミナーでは、毎年、むつ市の事例を提供してもらい、ワークショップ形式で議論しているが、今年の実例は、虐待、DV、精神障害を含む母子家庭を地域の支援機関と支援者たちが、丁寧な議論を重ねながら、連携してしっかり支えてきた事例だった。誰の人生にもいろいろなことが起こるものだし、この親子にこれから先もいろいろなことが起こるだろう。ちょっと困ったところもあるけれど何だか魅力的なお母さんと子どもたちを、地域が見守りながら支えている様子に、これが本来の支援だと思った。

セミナー参加者の活気にも驚かされた。こちらも入れ替わりがあるものの、固定メンバーが増えるにつれ、このセミナーの趣旨を理解して、主体的、かつ協力的に課題に取り組んでくださる参加者が増えているので、年々発言は活発になっていたが、今年は、セミナー開始前より、すでにグループのメンバーとの交流が始まっており、和気あいあいとしたムードが出来上がっていた。初めて会うメンバーとも、目的を同じくする同士として知り合い、知恵を寄せ合おうという姿勢は、これもきっと日常の支援の小さな変化につながるだろう。



地元で準備して下さった「ほほえみ講座」は、ほほえみとともに暖かさを拡げていこうとする青森発祥のムーブメントで、講座を受け、「ほほえみ太陽メッセージ7ヶ条」を実践する「ほほえみプロデューサー」はすでに4万5千人を超えるという。問題は専門家に丸投げするのではなく、それぞれがそれぞれの場所のできるささやかな取り組みを拡げていこうという主旨が素晴らしい。今年も、立命館側からも、職員として同行してくれた修了生の小池英梨子さんの「人もねこも一緒に支援プロジェクト」のプレゼンをして、とても好評だった。



2017年10月 宮城

2017年10月6日(金)~9日(土)

プロジェクト2017 in 多賀城

今年は一日早く仙台に入り、上山真知子さんと合流し、山形蔵王温泉に泊まった。濃い温泉に浸かり、山形牛のすきやきに舌鼓を打ちながら、常日頃感じていること、あらたに経験したことなど延々と語り合った。

翌日、仙台に戻り、会場である多賀城市立図書館で漫画展の確認をし、夜の支援者交流会に参加した。丸山元館長、中島順也館長、伊藤由美子さん（教育委員会学校教育課課長補佐）、CCC から三木さん、高橋さん（マネージャー）、おおぞら保育園からは、黒川先生、みなと先生、男性の保育士が来てくださった。

自己紹介をした後、それぞれ語り合う。教育的配慮もあってか、地元の方々は例年、若い院生たちに被災時の体験をしてくださる。それぞれの立場から見える風景、思いに皆、揺さぶられる。なかでも、大川小学校について、震災遺構についての思いを聞かせて頂き、それぞれなりに考えさせられたようだった。



10月7日(土)の午前は、鶴野祐介さんのコーディネートのもと、加藤恵子さん（宮城民話の会）とおおぞら保育園とのコラボで、「民話と絵本と遊びのワークショップ」が開催された。早くから来て待っていた親子や、たまたま通りがかった子どもたちなど、入れ替わり立ち替わり40~50名の方々が参加してくれた。

加藤恵子さんの語る民話には、幼い子どもから大人まですべての参加者を惹きつけて離さない力があつた。さすがだ。

おおぞら保育園の「パパの絵本読み聞かせ企画」では、3人のパパが絵本を読んでくれた。子どもの反応を伺いながら一生懸命絵本を読むパパたちの姿にママたちもほっこり、全体が暖かい雰囲気包まれた。その後、子どもも大人も、参加者も企画者も一緒になって、お手玉やこま回し、ゴム飛びなど、昔ながらの遊びを楽しんだ。

今年の漫画トークは、1階のオープンスペースで行われ、集中して話を聞きたい人には少し不満の残る形だったかもしれないが、参加の仕方にグラデーションのある、ゆるやかな境界の中でのトークは、なかなかよかったのではないかと思う。来年、立命館大学に入学するという高校生も来てくれた。

プログラム終了後、多賀城市立文化センターに移動し、山形大学の上山真知子先生に、沿岸部の史料レスキューとレジリエンスについての講義をして頂いた。人間は歴史的存在であり、歴史を救うことが人間を救うことなのだと思う。フィールドワークとして翌日訪れる大川小学校についてもお話を聞くことができた。



2017年10月10日(日) 旧大川小学校

午前、石巻にある旧大川小学校へ向かう。全校生徒の7割にあたる74人が死亡・行方不明になり、学校にいた先生11人中10人も犠牲になった。地震発生から津波到達まで約50分間あったが、子どもを運動場に待機させ、適切に避難させなかったと、子どもの遺族の一部と市・県との間で、事故の責任をめぐる裁判が続いており、何ともやりきれない気持ちにさせられる。

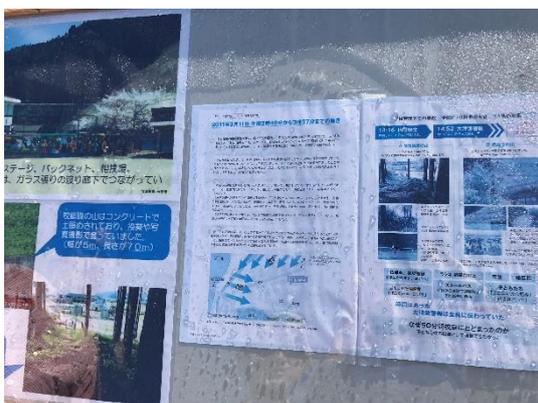
校舎は、2階建てのモダンな建物で屋上がない。津波の衝撃によるものだろう、鉄筋の渡り廊下が落ちて曲がっている。立ち入り禁止のロープの周りに咲き乱れるコスモスと青い空がたまらなく悲しい。



朝からたくさんの人たちが次々とやってきている。鹿児島ナンバーの車もある。校庭には、新しい慰霊のモニュメントが複数あり、3か所ほどにパネル展示があった。「50分あったのになぜ逃げなかったのか」と書かれ、地図と子どもたちの足取り、しいたけ栽培の山道を逃げる可能性を3つほど矢印で示してあった。

見ていると、3人の男性が道具を持ってやってきて、フレームやアクリル板をとってバージョンアップした表示に入れ替え作業をしていた。関係者なのだろうか。お一人は、「大川を語り継ぐ」のネームプレートを首から下げ、案内をしていた。なぜ逃げなかったのかの内容のようだが、話しながら涙ぐんでいる。どなたの立場に立って考えてみても、いたたまれない。

シイタケ栽培の道を見に行く。上の方は急こう配で、きのうの雪でぬかるんでいる。ずっと先まで行くと、お寺跡に新しい大きな観音像と記念碑があった。



女川

雄勝を通過して女川へ。駅前の小さな一角ではあるが、正面に海が見えるおしゃれなスペースとなっている。カフェや食堂、みやげもの屋が並び、お天気もよく気持ちのよい空間に、若い家族連れがたくさん集っていた。女川は、防潮堤を作らないことを決め（防潮堤がないのは、あとは決定がまだの気仙沼だけ）、盛土をして、商業スペース、宅地スペースと段階をつけているようだ。女川駅には温泉もある。海鮮丼を食べ、マザーポートというカフェへ。気仙沼のKポートとチェーン店なのだそう。薫り高くおいしいコーヒーだった。

それから、工事中の場所をぐるっと迂回して小高い丘に上がり、震災の後、避難所としても使われたという町営総合体育館内の一室で、安倍ことみさんから民話や震災体験談をうかがった。ことみさんは、家の壁が抜け、津波に顔までつかって流されたらしい。

昔話はおばあさんに聞いた。3人子どもがいたが、自分は昔話が好きで、おばあちゃん娘で、かわいがられた。あとは、友達を買ってきてくれた本などでも仕入れた。子ども向けにできない色話ばかりで、震災後、警察や自衛隊の人たちが喜んで聞いたという裏話を聞かせてくれる。昔話は関係のツールになる。「ふつうにはそんな話できなくても、昔話ならできるでしょう」と笑っておっしゃったが、おもしろいと思う。



それから、高台の地域医療センターに移動して、公園で、元教育委員長夫人の遠藤さんにお話を聴く。教育委員長は歴史家で、資料を書庫に集めたが、すべて流された。脳梗塞で倒れ、今は家で元気になっている。家の屋根の稜線まで津波につかった。孫たちとさらに上に逃げたが、あまり覚えていない。でも、カメラを持っていて、当日、周辺の写真を撮っておられ、引き伸ばしたものを見せてくれた。

女川浜で生まれ育ったという遠藤さんは、復興中の町を見下ろし、「やっぱり海が見える風景が好きです」としみじみと語られた。



駅前商店街に戻ると、ファッションショー（小さな女の子たちのドレスショー）をやっていた。

何か飲もうと店に入ると、おじさんがメロンジュースを飲んでいたので、同じものにした。桃が一番おいしいが、今日は売り切れたのだそうだ。他所から仕入れており、今日のメロンは青森産。

おじさんがいろいろしゃべってくる。もともと三重の出身だが、名古屋から来ている。6年前から復興の工事をしている。引き潮の加減で、夜の11時頃まで作業をすることもある。毎日ここにくる。家のようなもので、みんなよくしてくれるとご機嫌だった。



つづく